

The Cathy Project

- Pragmatic Method of Teaching English Pronunciation -

(1) 予備調査

宮 武 香 織

1. はじめに

中学・高校で一連の英語教育を受けてきた大学生に、実践英語としての英会話、そしてその前提に必要な音声英語教育としての発音法に関してアンケート調査を実施した。自由記述形式と「英会話の実習に対して、100%中 () %の意欲がある。」「発音の実習に対して100%中 () %の意欲がある。」の空欄に数字を記入する形式にした結果、英会話は66.5%、発音は59.7%の平均値で「実施したい」意欲があるということが判明した。この後、実際に発音指導を一度行った後でターゲット音を評価基準とした発音に特化した英会話課題をグループ単位で数回実施した後、意欲の%のみ再びアンケート調査を行った。その結果英会話は73.8%に、発音は68.6%にと、どちらも数値が上昇した。該当項目である英会話と発音法の学習意欲が英会話課題によって高まったと換言できるだろう。

2. 従来型の発音法授業の効能への疑問

The Cathy Project という名前の発音に特化した英会話課題を始めるきっかけとなったのは、英文学科で Pronunciation のクラスを担当したことによる。その講義は専任教員のシラバスに従って統一のテキスト・実技テスト・中間・期末試験を実施し、統一評価基準で成績を出す形式であった。シラバスのチャプターに沿えば、具体的な指導方法は自由裁量に任されていたが、最終実技テストの課題が「マイフェアレディ」のイライザの独白シーンを読ませて採点することであった。そのシーンのみの動画も配信され、アメリカ人教員がイギリス英語で吹き込んだ e-Learning も用意されており、学生は講義外に自習してこのテストに挑む。テキストはアメリカ英語に関する音声学の教科書でありアメリカ英語を教えてきた。通年アメリカ英語の発音を叩き込まれ、最後にイギリス英語の発音を求められる不条理に一年生はなんの疑問も持たずに健気に練習したものの、ほとんど全員が混乱した状態で実技を終えた。この講義では実技テスト以外で長い文章を発する機会はありません、音素、単語、短文といった基本的な step by step の練習は行いうが、自発話の中で学んだ発音を使えるようになったのかを問うには時間の制約から不十分に終わり、非常に忸怩たる思いをした。贅沢にも通年に渡って英語の発音法のみを学べるのに、習った事柄を carry over する機会を与えられなかった。この経験から、自発話で「学んだ発音」を使うタスクが必要であるとの考えに至り、以来 The Cathy

Project という課題を行っている。

3. The Cathy Project とは

The Cathy Project は担当教員が外国人留学生に扮して、学生と対話する実践英会話実技課題である。与えられたルールに沿ってグループ単位で課題達成に向けて英会話を行うが、会話続行の評価基準は主にターゲット音素を正確に構音しているか否かである。

課題内容

これは、4~6人単位のグループ課題である。教員が来日したての留学生で、初めてキャンパス内で出会ったという設定でグループと会話し、その流れで自動販売機まで行き、Cathy（留学生/教員）が「日本式自販機」の使い方をグループメンバーに教わりながら無事飲み物を買ひ、蓋を開けて（これも英語で指示を受ける）飲むことができたなら mission complete で合格である。

課題のルール

この課題のルールは 1) 沈黙禁止 2) 日本語禁止（「えっ」「あっ」も禁止） 3) グループ全員が必ず話すこと 4) ターゲット音 th は舌を 5mm 出すことの 4 つのみである。この 4 つのルールに反する場合は即時実技の中断となる。

実施方法

学生にはルール以外に詳しくは説明をしない。実技中の trial & error を通してグループ内で問題を解決させる。会話中に不適切な文法・行動・内容が含まれた場合には、「文法エラー」「状況エラー」と伝えて実技を中断する。クラスのレベルによっては、文法エラーの発生時、適宜文法事項の説明を入れることもある。同じく状況エラーにて看過できないものにおいては適宜説明を入れる。Cathy は最初、圧迫面接のようにグループと接する。アメリカ人の大学生は日本人が思っているほど見知らぬ人に対して能天気フレンドリーではない。日本人スマイルにほだされてナアナアで会話もどきが進むような状況を作ってはいけない。学生が沈黙したら即終了。日本語が思わず出ても即終了。口元はしっかり観察し十分に舌先が出てない場合は「5mm でていない」旨伝えて終了とする。

課題の評価

この課題は、何事も問題が起きなければ自動販売機で飲み物を購入し、蓋を開けて飲むことで合格する。それ以外は、合格するまで何度も最初から行うのみである。飲み物の購入に関しては、したフリでも良いが実際に小銭を入れて購入しボトルの蓋を開けて飲むところまで実践すると学生のテンションも上がるのでその場の状況で選択する。

課題の流れ

初めは、ためらうと「沈黙」終了になる・thの舌が出ないなどが主な原因で、数秒単位内での終了が続く。結果10分の間に10回ほど機会が回ってくるので、グループで話し合う暇はない。頭を使う（これが沈黙につながる）より、反射にまかせて何度も繰り返すことになる。途中から、グループ内で間違いに気づいたら "I mean", "He means", "She means" を使って訂正することで終了から逃れることができるルールを追加する。これによってグループはメンバーを積極的にモニターすることを学ぶ。ある程度連続して実践したら、数分各グループで練習する時間を与える。これを繰り返す。慣れてくると、1グループ数分続くので、他のグループの自習状況を見ながら、集中が途切れているようなら、課題のハードルをあげて、会話内容を難しくするなどグループ・クラスの雰囲気と実力に合わせて行うことになる。

学生の反応

最初は何が何だか分からず、沈黙やthで終了させられることが延々と続くので、学生の言葉によると「心が折れる」「鬼畜だ」「無理」などネガティブな反応が多い。しかし、グループ単位の行動なので連体感も強くなり、だんだんとゲームとして楽しむようになる。

アンケート自由記述の感想によると「この授業の前はちょっとやりたくないなって思ってしまったり、緊張しすぎてやけ食いしたりしてしまっていたのですが、実際やってみると、とても楽しくできたと思う。こういう風楽しく英会話できるとにがて意識もなくなってくるのかなと思った。」「はじめは発音が難しく英語でしゃべるのは気が引けるものだったが、ゲーム感覚でやると思っていたより楽しくなった。来週は次のステップに進めるようがんばりたい。」「英会話は苦手意識がありましたが、今日はチームのみんなとワイワイできて楽しかったです。」「週を重ねるごとにクラスの雰囲気が良くなっているのを感じるので、楽しいです。ゲームだと思って積極的に話していこうと思います。」などがあった。

ゲームとしての課題認識

学生はグループ単位の行動になるので負担が分散される。グループの誰かが発話・発音・文法・状況エラーなどで失敗しても教え合うなど協力し合うことで連帯感が増す。みんなで自販機まで行くという明確なゴールを目指すことがゲームの感覚として受け入れやすい。英語の授業というよりは英語をツールとしてゲームに挑んでいる気持ちになる。これらで、当初持っていた英会話に対するハードルの高さ、人前で失敗する怖さ、恥をかきたくない気持ちが軽減されていくようである。数年前のクラスではCathyが「ラスボス」と呼ばれていたことから、グループで一丸となってラスボスを倒すことを目標にしているゲームと認識されていることが分った。

The Cathy Project で使用するターゲット音

この課題の主要目的は英会話を行うことではなく、ターゲットの音の自発話での使用と構音の正確

さの定着にある。たとえ発音法で全ての音素の指示を入れていても、この課題で狙うのは1つにすべきであろう。学生・教員ともに1つに集中したほうが負担にならずメリットは大きい。期間を決めてターゲット音を変更することも可能である。実際学生側から、次回は違う音でも試したいとの意見が出ることもある。

筆者が th/θ/ /ð/ のみをターゲット音に使用する理由は、1) 日本語にない音であること、2) 視覚的チェックが学生にも容易であること、3) 冠詞・代名詞などにも含まれて使用頻度が高いこと、4) 誰もが必ず使う感謝の言葉 "Thank you" に含まれる音であることなどが挙げられる。

/θ/ /ð/は、舌を噛まないなどの意見もあるが、この課題では敢えて5mm出すということをルールに含むことで、大げさに /θ/ /ð/ の構音を取らせることを狙っている。natural speed の自発話になれば、いちいち舌を噛んで舌先が見えるようなことは少なくなる。が、それは慣れてからの自然な流れであって、指導現場でそれを容認するのは避けた方が良いとの判断である。学生には前以てその旨伝えておくことことで学生の学習上の情報混乱は避ける。感謝を表す「ありがとう」を丁寧という場面は、アカデミー賞授賞式の映像などに多く見られる。ほとんどは口元をよく見ると舌が出ている。そこで、課題の途中で学生が精神的に煮詰まってきた場合には、授賞式のシーンを YouTube などで見せると説得力があり、学生に新たな motivation が生まれ、上達につながる。加えて、人に礼をいうときに正しい音で言わなければせっかくの感謝の気持ちが半減して伝わることになるという話も pep talk として入れると有用である。この課題の名前 The Cathy Project の Cathy にも th が入っているので、学生は名前を呼ぶごとに th の練習になる仕組みになっている。

4. アンケート調査

調査目的

学生がこの The Cathy Project を通して発音練習をすることで、どう上達するのかを調査する前段階の予備調査として、今回学生に自由記述方式のアンケートを実施した。

調査方法

非英語専攻大学一年生 32 名に、英会話と発音に関する記述式のアンケートを行った。

質問項目は以下の通り：

1. 英語で話すことは_____。
2. なぜなら_____。
3. 英語の発音は_____。
4. なぜなら_____。
5. 英会話の実習に対して、100%中 () %の意欲がある。
6. 発音の実習に対して 100%中 () %の意欲がある。

数回の The Cathy Project 実施後に再度アンケートで、上記の問 5.6.の%設問と課題をやってみた感想を記述させた。

調査結果

問 5.の「英会話の実習に対して、100%中 () %の意欲がある。」と問 6.の「発音の実習に対して100%中 () %の意欲がある。」の回答は、英会話が平均 66.5% (最高 100% 5名、最低 20% 1名) で発音は平均 59.7% (最高 100% 4名、最低 0% 1名)であった。実習後のアンケートでは、英会話 が 73.8% (最高 100% 5名、最低 10% 1名)で発音が平均 68.6% (最高 100% 6名、最低 10% 1名) と、どちらも値が上昇した。

考察

The Cathy Project を数回実施した前と後では、学生の英会話と発音の実習に対する意欲に正の上昇がみられた。Project 前のオープンエンド形式の質問の回答では半数強の学生が英会話に対して否定的な意見であり、好き嫌いを含む感情面でのコメントが多かった。一方の発音に関しては、難しい・苦手という技術的に自信がないという気持ちが半数を占めていた。感情的なコメントよりも「やるべきなのだが」という含意のコメントが多いのは、発音の練習と上達が自分には必要であるということの認識からくるものと推測される。

5. まとめ：アンケート結果と実践から見てきたもの

大学一年生に、簡単な発音指導を行ったのちに、The Cathy Project という発音に特化した英会話課題を実施した。単なる英会話の課題の場合には、peer pressure や恥をかきたくないなどの後ろ向きの気持ちが縛りになり、思うように言葉を発音することができない学生が多い。今回の課題はグループで行なうことで、個人の負担とネガティブな気持ちが減少されやすくなったと考えられる。会話には簡単なルールとゴールを設定したことによって、ゲームの感覚で課題に取り組むことができたようである。ゲームをグループで攻略するという共通の目標ができたため、楽しく課題に取り組むことができたようで、自由記述の感想にもそれが示されていた。

今回は、実際のターゲット音の定着具合を測定することはしていない。英会話課題によって発音の練習に意欲を持つことができるかのみを調べた。概ね意欲の上昇が示されたので、次回は、学生の発音にどのくらいの上達がみられるかを調査することにしたい。

参考文献

- Ashby, Patricia (2011) *Understanding Phonetics*. London: Routledge.
Collins, Beverley, Mees, Inger M. (2013) *Practical Phonetics and Phonology*, 3rd edn. London: Routledge.
Carley, Paul, Mees, Inger M., & Collins, Beverley, (2018) *English Phonetics and Pronunciation Practice*.

London: Routledge.

Greaghead, Nancy A., Newman, Parley W., & Secord, Wayne A., (1989) *Assessment and Remediation of Articulatory and Phonological Disorders*, 2nd edn. Columbus, Ohio: Merrill Publishing Company.

Ladefoged, Peter, & Maddieson, Ian, (1996) *The Sounds of the World's Language*, Malden, MA: Blackwell Publishing.

Laver, John, (1994) *Principles of Phonetics*, Cambridge: Cambridge University Press.

表 1. アンケート回答 質問 1

質 問	回 答	人数
英語で話すことは	苦手	9
	難しい	5
	楽しい	4
	好きではない	3
	嫌い	2
	将来役に立つ・将来の可能性を広げることにつながる	2
	そこまで難しくはない	1
	簡単	1
	大変	1
	大切	1
	必要 1	1
	緊張する	1
	大きな声で	1
	おもしろい	1
	好き	1
	コミュニケーションと気持ちの交換である	1
		複数回答あり 合計

表 2. アンケート回答 質問 2

質 問	回 答	人数	
なぜなら	国際化だから・世界共通語だから・他の国の人と話すことが可能になるから/友達 ができて話せたらカッコいいから・外人とコミュニケーションが取れるから	10	
	うまく伝えられないから・すぐに答えられないから・次に何を話せばいいのかと所々 止まってしまうから・頭の中でごちゃごちゃになってしゃべれなくなるから・慣れて おらずとっさに出てこないから・必要な英単語が出てこない	8	
	恥をかきそうだから・文法・発音などに自信がないから・話すときに内容や単語が あっている気にしてしまうから	3	
	文法の違いや単語がわからなかったりするため・表現が難しいから・単語を知らな かったり文構成に慣れていないから	3	
	発音できないから	1	
	今までやってこなかったから	1	
	難しいから	1	
	英語で話さなければならない場面を想定していないのでモチベーションを保てない から	1	
	昔から英語で会話してみたいと思っていたから	1	
	相手に聞こえないとダメだから	1	
	頭を使って話し、身になっていく感じがするため	1	
	ジェスチャーも使えるから	1	
		合計	32

表 3. アンケート回答 質問 3

質 問	回 答	人数	
英語の発音は	難しい・至難の技	12	
	苦手	6	
	好き・座学より楽しい	3	
	コミュニケーションに最重要・大切	2	
	自信がない	2	
	きちんとやったほうがいい・難しいからやったほうがいい	2	
	上手くない	1	
	簡単だが間違っていることもある	1	
	命	1	
	意外と自分が考えているより細かい	1	
	大げさに	1	
		合計	32

表 4. アンケート回答 質問 4

質 問	回 答	人数	
なぜなら	日本語にはない発音が沢山あり難しいから・Tの発音など克服できていないことが多いから・普段使わない音や舌の動きがあるから・英語と日本語の発音が全く違うから・同じような音でもたくさん種類があるから・普段日本語を話している時には使わないような発音やlとrのように微妙に異なる発音があるから・口の形を意識しないといけないから・舌の位置、アクセントの意識が難しいから	13	
	発音が大切だから違う発音では伝わらないから・相手にきちんと伝わらないから・発音が悪いと聞き取られず意味がないから・発音が違うだけで単語が違ったり逆に相手を不機嫌にさせてしまうからである。実際にハロウィンのことで殺されたケースがあるらしいから・違う単語に間違われるから・国によっては発音を気にするから相手に正確に伝えたいから	6	
	違いがよくわからないから・区別がつかないから・聞き取りもアなのかオなのかわからないから・合っているかわからないから	4	
	英語を話す機会がないから・文化の違いもあるが話す回数が日本語より圧倒的に少ないから	3	
	やっていなかったから・詳しく習ったことがなかったから	2	
	発音に慣れていないから	1	
	スペルが似ていても違う発音でおもしろいから	1	
	音として聞いていて気持ちがいから	1	
	より言葉を学んでいる気がするから	1	
	英会話教室に通っていたから少し英語慣れしていたから	1	
		複数回答あり 合計	33